

エッセイスト 近藤 節夫（会員）

結婚して独立するまでの一六年間を過ごした、わが青春のグラフィティを刻んだ懐かしい寓居と庭園はいまはもうない。

《湘南海岸・鵠沼》は、東京駅から電車ではほんの一時間ばかりの、ほどよい通勤圏内にある。だが、それは戦後のことであって、戦前そこにはサラリーマンが住むベッドタウンのイメージはなく、ゆとりのある富裕階級が別荘を構え、軽井沢と並び称された別荘地だった。海岸から運ばれてくる心地よい潮風にさらされ、潮騒や周囲一帯の広い松林の間から野鳥のさえずりが聞こえる風情とたえずまいが、芥川龍之介を始めとする多くの文化人に愛され、大正、昭和の初めから多くの文人墨客が居を構えるようになった。庭園に餌を啄ばみにやって来る幾種もの野鳥たちや、蛇やもぐらもいたが、その中では何と言っても季節になるとウグイスや、珍しい「ブッポウソウ」の鳴き声が聞けるのは至福の時だった。どことなく洒落っていて、文化的香りの漂う辺り一帯は、じっと目をつぶるとそのままシャングリラの世界へ連れて行ってくれるような陶酔感に浸らせてくれた。とりわけ雨上がりの松林は都会では味わえない天与の環境を創造し、ひとりその中に身を置いていると、ツンと鼻をつく松の実の甘い香りが気持ちに爽快に刺激してくれたものだ。

わたしの実家の周辺にも大きな黒松が見上げるように群生し、いつも上空をトンビが旋回しては、のんびりとした牧歌的な風景を演出してくれた。

多感だった半生を形成してくれたといってもいい、この《湘南海岸・鵠沼》の地で、わたしは高校時代をラグビーや、海水浴に熱中して身体を鍛えた。学生時代には六〇年安保闘争や、ベトナム反戦運動にも参加して社会の矛盾を知り、国家権力の壁と横暴さを知った。やがて社会人となり、結婚してわが家を離れることになった。書生っぽかったわたしが人並みの知恵を身につけ、大人としての考えを固め、成長していったのもこの鵠沼界隈の自由で温かく、のどかな雰囲気のおかげである。

四年前に一人住まいしていた父が九三歳で亡くなると、後ろ髪を引かれながらも築七〇年の年輪が沁みこんだ家屋を手放さざるを得なくなつた。静寂をこよなく愛し昔をよく知る界隈の人びとがそれを惜しみ、その後の住宅環境の荒廃も心配して、わたしたち兄弟の誰かがそこに住むわけにはいかないものだろうか、所詮無理な相談にやつてきた。

まもなく人手に渡るといある秋の一日、長い間お世話になった近所の人たちや、友人たちを招いてお別れのガーデンパーティを催した。

涙ながらに旧居に別れを告げるわたしたちの胸の内を知ったのか、庭内に聳え立つ一本の高い松の木に巣作りをしていたトンビが、普段見なれない仲間とともに、いつまでもわが家の上空を名残惜しそうに、何度も繰り返し旋回してくれている光景を仰ぎ見るとい胸が詰まった。セピア色の想い出とともに永遠の別れがやってきた。